



発行所
始良市平松6252番地
鹿児島県防災研修センター内
一般財団法人 鹿児島県消防協会
電話 (0995) 64-5401
FAX (0995) 64-5402
編集者 鹿児島県消防協会

年頭に際して



一般財団法人 鹿児島県消防協会 総裁
鹿児島県知事 塩田 康一

明けましておめでとうございます。

消防団員及び消防職員の皆様におかれましては、日頃から地域住民に対する火災予防思想の普及・啓発に努められるとともに、消火や救急など厳しい任務を迅速・的確に遂行され、県民の皆様お一人お一人の安心・安全な暮らしの確保に多大な御貢献を頂いております。

また、地震・津波や風水害などの災害時には、人命救助をはじめ応急対策等に献身的に従事され、県民の皆様への命と貴重な財産の保護に大きく寄与されております。

昼夜を問わず常に第一線で消防・防災活動に御尽力いただき、心から感謝申し上げますとともに、たゆまぬ御努力に深く敬意を表します。

昨年は全国各地で大規模な火災が相次ぎ、二月に若手県で林野火災が発生したほか、十一月には大分県で一八〇棟以上が延焼する火災が発生しました。本県でも、一月に三島村硫黄島で林野火災が発生し、地元消防団をはじめ、県内消防応援隊や自衛隊ヘリ等が消火活動に尽力されました。

また、近年は気候変動等の影響により、全国で自然災害が激甚化・頻発化しております。本県でも、昨年六月にトカラ列島近海で地震活動が活発となり、一時、島民の方々が島外へ避難されたほか、八月の大雨及び台風第十二号により、県内で二名の方が亡くなられ、県内各地で断水や停電、住宅の浸水、道路等の公共土木施設や農作物等への被害が生じました。



新年のごあいさつ



一般財団法人 鹿児島県消防協会
会長 前川 周三

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

皆様におかれましては、輝かしい新春をお迎えのことと存じます。平素より当協会に対し格別のご支援とご協力を賜り、心よりお礼を申し上げます。また、日頃より、県民の皆様のご生命と財産を守るといふ使命のもと、献身的に活動されている消防団員、消防職員、そしてご家族の皆様にご心より感謝と敬意を表します。

でも大規模な林野火災の発生、大分市の大規模火災では、延焼の恐れしさを改めて痛感させられました。また、記録的な猛暑による熱中症患者の急増は、自然の力の脅威と災害の多様化を物語っています。

県内においては、トカラ列島における群発地震や新燃岳の爆発的噴火という火山災害も発生し、住民の皆様にご不安を与えました。さらに、夏には霧島市、始良市での集中豪雨による土砂災害や浸水被害。また、南さつま市を襲った台風による甚大な

風水害が発生し、団員一丸となって水防活動、警報活動、そして被災された方々への支援活動に取り組みました。これらの現場活動において団員一人ひとりが迅速かつ的確に行動できたことは、日頃の厳しい訓練の成果に他なりません。私たち消防団の存在意義は、県民の皆様への安心安全に直結していることを改めて感じた一年でありました。

また、十月に横浜市で行われた全国女性消防操法大会に本県代表として、日置市女性消防隊が出場され、みごとに上位入賞



わが町の消防団活動

「日本消防協会会長表彰」表彰旗を受賞して



伊仙町消防団団長
樺山 修二

伊仙町は、鹿児島県徳之島の南部に位置し、豊かな自然と温かい地域文化が息づくまちです。黒潮の恵みを受けた澄んだ海とサトウキビ畑の広がる風景は、訪れる人々に安らぎを与えます。また、全国的にも知られる「長寿」や「子宝のまち」としての特色を持ち、命や家族を大切に育む文化が根付いています。出生率の高さは地域の活気の象徴であり、住民が互いに支え合う温かなコミュニティが形成されています。

今回の受章は、こうした取り組みを支えてくださる地域住民の皆様、関係機関の皆様のご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。表彰旗を励みとし、伊仙町消防団はこれからも慢心することなく、地域を守る体制のさらなる充実を図ってまいります。

このような地域を守り支える伊仙町消防団は、このたび日本消防協会より令和七年度日本消防協会定例表彰旗を受章する栄誉にあずかりました。長年にわたり島の防災力の要として活動を続けてきた当団の取り組みが評価されたものと考え、責任の重さを感じております。

伊仙町は離島という地理的条件から、災害発生時には本土からの応援がすぐに到着しない可能性があり、初動対応を地元の方で確実に行う必要があります。そのため、消防団は地域防災の中心的な役割を担っています。当団では、限ら

し、優良賞を受賞しました。さて、本県の消防団員数は昨年同日と比較し二四三人少ない一四、二〇二人となっております。内訳は男性一三、五四〇人、女性六六二人です。全国的に消防団員数の減少が続いており、高齢化も進行しております。消防職員並びに消防団員の皆様におかれましては、これからも消防団員の確保や消防団の活性化のためにご尽力いただきますとともに、地域住民の信頼と期待にこたえるため、一致団結して指揮の高揚と技術の錬磨に努められるようお願い申し上げます。

念頭にあたり、皆様のさらなるご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。

**消防の仲間が支える
個人年金
消防個人年金に加入を**

**将来の自分の為の
積立年金制度です**

.....

まさかの時お役に立ちます!

掛金25口2,500円で、
56%以上の焼損の場合
**火災共済金
375万円のお支払い**
風水雪害等共済金付
1500倍補償

消防団員・消防職員なら
どなたでも加入できます

第二十六回全国女性消防操法大会に出場して

日置市消防団総務部長 福田直美

私たち日置市消防団総務部は、令和七年十月二十八日に横浜市赤レンガ倉庫イベント広場で開催された第二十六回全国女性消防操法大会に出場いたしました。日置市、そして鹿児島県代表として全国の舞台上立つという、この上ない光栄と感動を胸に、まずは大会出場に至るまで多大なるご指導と温かいご支援を賜りました全ての皆様

に、心より感謝申し上げます。特に、日本消防協会、鹿児島県消防協会、同日置支部、日置市消防団の皆様、そして日々私達をご指導くださった日置市消防本部の皆様には、厚く御礼申し上げます。また、長きにわたり私たちの練習を献身的に支えてくれたサポーターメンバの皆さんの存在も、忘れることはできません。本当にありがとうございました。

私たちにあって今回の全国大会への道のりは、決して平坦ではありませんでした。二年前の鹿児島県大会での敗北を糧に、「日本一最強の女性消防団」を目指し、技術の向上はもちろんのこと、紙芝居による火災予防啓発活動や団員募集など、多岐にわたる活動にも積極的に取り組みました。

県大会で優勝という快挙を成し遂げた私たちは、今度は鹿児島県代表としての責任の重さを痛感いたしました。そこから始まった全国大会へ向けた強化訓練と、協力会組織を持たない私たちが行った資金集めは、仕事と家庭を両立する団員にとって、精神的・肉体的に非常に厳しいものでありまし

た。強化訓練では、技術の追求だけ

でなく、私たち一人ひとりの精神的な成長と、強固なチームワークの構築につながりました。時には意見がぶつかることもありましたが、「鹿児島県代表として最高の操法を披露する」という揺るぎない共通の目標のもと、困難な訓練をやり抜くことができました。

何よりも心強かったのは、家族や職場の皆様の温かいご理解と、全面的な協力的なサポーターです。この支えがあったからこそ、私たちは平日の夜間や週末を返上して、練習に集中することができたのです。

また、資金集めでは、地域の小さなお祭りなどで物品販売をさせていただき、「頑張って」「応援しているよ」という数多くの励ましの言葉をいただきました。これらの温かい声援一つ一つが、私たちの背中を強く押ししてくれました。

大会当日は、少し肌寒い横浜の風を感じながら、極度の緊張の中に取り組みました。集合線に集まった選手たちの面持ちには、これまでの練習では見ることがないほど、自信に満ち溢れた力強い表情へと変わっていました。この瞬間、「本当にこれまで苦楽を共にしてきた仲間最高の雄姿」を垣間見ることができ、胸が熱くなりました。

結果は十一位優良賞をいただくことができました。全国の舞台上、日置市消防団総務部として最後まで私たちがらしい操法を披露できたことは、団員全員にとって、かけがえのない経験と大きな自信となりました。

この全国大会への挑戦という貴重な経験を通して得た、技術、チー

ムワーク、そして何よりも地域の方々と消防本部の皆様からの温かいご支援の重みを、私たちは決して忘れません。この経験を糧に、これからも消防団活動を通じて地域防災への貢献に邁進していく所存です。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



第十五回鹿児島県女性消防団員研修会を終えて

薩摩川内市消防団 団長 宮里英子

令和七年二月八日、鹿児島県女性消防団員研修会が、薩摩川内市国際交流センターで開催されました。ところが、予期せぬ大雪の影響で、当初の四百名ほどの出席予定者が三分の二の出席となり、こんな不運があるのかと気持ちが沈みました。

しかし、開催続行と決まっただけでは、薩摩支部の団員たちは、職員の方々の力も借りながら精一杯の受け入れ体制を整えました。会場のロビーには、甕航路の船が欠航となり、女性団員は参加できなかったものの、事前に届いていた展示物が華やかに飾られました。

オープニングは、『薩摩川内火けし保存会』の木遣り唄と纏振りで幕を明けました。女性団員の研修会に、男性団員も協力して欲しいという思いが叶い、立派に演じてくれた男性たちに感謝の気持ちでいっぱいでした。男性たちも女性団員の頑張る姿をみて、何か感じる物があつたと感じました。

活動事例発表では、さつま町の女性団員が、『大切な家庭を救うのはあなた』と題して、救命の啓発劇を披露しました。薩摩川内市団本部女性分団は、原子力防災についてのメッセージをハンドベルの演奏とともに披露しました。

意見交換会では、パネラーを鹿屋市、始良市、さつま町の女性団員とファシリテーターの堀之内広子氏が団員確保や活動参加率の向上についてディスカッションされ、様々な課題の解決法に参加者も聞き入っていました。最後に沖縄県消防会長の久高清美団長の講演を聴いて、「恐れずやってみ

る！」という言葉に勇気とエネルギーをいただきました。

この研修会が始まった当初は百人にも満たなかったものが、現在の女性団員数は約六百五十名程に増加しています。この女性たちが、消防団として何かをやるうと意欲的に取り組んでいます。妥協を許さない女性たちは、とことん追求する。今回の開催地が決まった時から、我が支部の女性たちは市町の垣根をこえて立ち上がりました。「自分たちで出来る事をやるう！」と。啓発劇やハンドベルの練習の合間には、お土産品の制作。費用もかけられない実情から考えたのは、廃棄消防ホースを利用したキーホルダー作り。廃棄ホースをカットし、漂白、手洗いで洗浄。なかなか落ちない汚れを根気強く洗い、そして更に細かくカットし、金具をつける。メッセージを入れてラッピング。販売出来るくらいの作品が出来ました。本当に良く頑張りました。

この研修会のために女性たちは、どれだけ時間を費やしたであろう。仕事もあり、家庭のことも切り盛りする団員たちが愚痴も言わず取り組み、終盤に入ると、さすがに疲れがピークに至っていることも感じている中、「限界がきているね！」とお互いに笑い合っている。ひたすら研修会の成功を思い願っていました。雪の影響で参加者が激減しましたが、みんなの顔は清々しい達成感で満ち溢れていました。まさに「これぞ！薩摩の女」と称するかのようでした。

最近では、火災現場に行く女性団員も増えてきました。一昔前の女性には「現場活動は無理でしょ

う！」と言われてきたことが、今は普通に出る、させてもらえる時代になりました。これからは男女分け隔てなくお互いに認め合い、助け合うことで消防団活動に柔軟さが出てくると思います。

この研修を通して、「懸命に協力してくださる人の温かさ、やるからにはとことんやる！」という気迫を実感しました。感謝の気持ち、そしてチャレンジ精神を忘れず、更に魅力ある消防団に発展するよう、力を注いで行こうと思えます。



第三十回全国女性消防団員活性化 長崎大会に参加して

鹿児島市消防団女性分団 副分団長 大山 佳子

今回の長崎大会では、防火防災啓発劇の舞台発表の機会をいただきました。

発表した啓発劇は、日頃、「幼児向け防火教室」として取り組んでいるものです。

平成三十年に女性分団が発足し、紙芝居を作成、寸劇を加えて本格的な活動を開始しました。現在、女性分団には五十名が所属し、中央地区十五名・西地区十八名・南地区十七名の三地区に分かれ、普段は各地区で要請のあった幼稚園や保育園に向き活動しています。

九月の定期ミーティングで、分団長から「全国活性化大会で舞台発表することが決定しました」と告げられ、出席していた約四十名の団員から歓声が上がりました。

まずは大会当日に参加できる団員の確保です。寸劇は基本七名で演じますが、万一に備え倍の人数を確保しました。次に、昨年度行われた、「鹿児島県女性消防団員研修会」での舞台発表経験をもとに準備に取り掛かりましたが、今回は大会や会場の規模が異なり、演者はもちろん、紙芝居や小道具にも手を入れる必要がありました。

当初は週二回の寸劇練習から始め、大会が近づくにつれて練習回数数をさらに増やし、小道具の作成には全団員の協力を求めました。この期間中、団員は本業に加え、昼は例年を大きく上回る地域防災活動や全国秋季火災予防運動、夜は大会準備と、充実したとても慌ただしい時期を過ごしました。

得できる演技を目指したい」「会場の方皆さんに思いを伝えたい」と熱が入り、大会当日の朝までスタッフと綿密な打ち合わせを続けました。

そして迎えた舞台発表本番。団員は堂々としていて、頼もしく誇らしく思えました。特に舞台から呼びかける場面では、日本消防協会会長や理事の方々をはじめ、会場全体を巻き込み、満足する啓発劇を披露することが出来ました。

大会終了後の交流会でも、全国各地の団員の皆様から称賛の声をいただきました。

今回の舞台発表の成功は、取り組んだ団員にとっても今後の活動の励みになると思います。女性分団は幼児向け教室だけでなく、市民の安全・安心のための活動に取り組み、今後も精進してまいります。

最後に、今大会の舞台発表にあたり、大会主催の長崎県消防協会及び大会運営スタッフの皆様には、リハールから当日まで様々な要望に添えていただき、心より感謝申し上げます。また、本市女性分団の参加にご尽力くださいました県消防協会及び本市消防局並びに関係者の皆様にも、深く御礼申し上げます。

ありがとうございます。



第五十一回消防団幹部特別研修を受講して

指宿市消防団 副団長 田代 繁 樹

令和七年一月十四日から十七日にかけて、日本消防協会主催の消防団幹部特別研修に参加させていただきました。

講義は、日本消防協会の秋元会長をはじめ、多くの講師の方々にご登壇いただきました。その中で、印象に残った講義を紹介します。

現代の異常気象によって、台風や豪雨災害、地震などが多発しています。猛烈な豪雨災害が発生したという設定でシミュレーションを行い、仮想の地図上で消防団の活動について議論しました。

水や橋の決壊、被災者の保護、老人ホーム入居者の移送など、災害時の行動や指示を的確に議事録にまとめることの重要性を学びました。

特別講師として、新潟県糸魚川市で大火災が発生した際の団長の講話もありました。一四七件の家が焼失し、十七名の負傷者のうち、消防団員が十五名だったということに驚きました。

また、一般の負傷者が極端に少なかったことも衝撃的でした。消防団員の負傷原因は、強風による飛び火での火傷や目の負傷、捻挫、釘踏みなどでした。大災害発生時には地域の特徴や気象状況を把握し、迅速に行動することが重要です。

被災防止のためには、装備品の整備や定期的な研修の実施が大事だと感じました。

今回の特別研修を受講し、自身の防災に対する意識を見つめ直し、活動の幅を広げること、一人でも多くの市民に寄り添えるのではないかと考えさせられました。



第十四回 令和六年度 「防災川柳コンクール」 入賞作品



最優秀賞（二句）

○震災で 受けた教訓 伝える使命 (なぎさ)

優秀賞（三句）

○防災で 未来の笑顔 守りぬく (江口 秀和)

○防災は 繋ぐ伝える 語り合う (浜長薬丸)

○減災を 尽くしてイザに 立ち向かう (カジ)

今年度も現在募集中です。皆さんふるって応募ください。応募方法は、鹿児島県防災研修センターのホームページをご覧ください。
【締切】令和八年一月三十一日

「令和7年8月7日から8日にかけての豪雨災害」の消防団活動

霧島市消防団単方面隊 日当山第一分団姫城部部長 芝 幸宏

私の所属する霧島市消防団単方面隊日当山第二分団は、霧島市の国分地区と隼人地区の境を南北に流れる二級河川天降川水域を管轄しているため、天降川の水門及び排水ポンプの管理をしています。

令和七年八月八日午前一時三十分、私の携帯電話の着信音が鳴りました。それは日当山第二分団長から、天降川の増水による水防警戒の出動要請でした。姫城部の部長である私は、直ぐに部員全員に出動を要請しました。二十人の部員はあらかじめ四班に班分けされ、一班から三班までは管理する三箇所の水門及び排水機場に集合することになっており、午前二時過ぎには各自が持ち場に集まり、排水機場にあるポンプを稼働させました。

出動要請からポンプ稼働までの間、雨は断続的に降り続け、午前二時から三時までの時間雨量は一〇七、五mmで、八月七日午後六時から八日午前六時までの十二時間雨量は霧島市で観測史上最高の五四一mmとなり、これまで経験したことのない雨量でした。

市内各地で内水はん濫が始まり、管轄する姫城地区の排水機場付近も内水はん濫が発生し、浸水最大水位は二mほどありました。

その後も雨は降り続き、午前三時には、天降川日当山橋でははん濫危険水位六、四mを超え、午前三時二十五分に市内全域に避難指示が発令、午前五時には霧島市で初めてとなる大雨特別警報の緊急安全確保が発表されました。

夜空が少しづつ明るくなる午前五時五十分頃、私と新入団員二名

で、管理する水門及び排水機場の見回りに出た時のことです。

姫城三号排水機場を過ぎた辺りで、部員の一人が冠水した道路に沈みかけた軽自動車を見出し、部員二名と共に少しずつ車に近づくと、車内から「ドンドン」と助けを求めの音がしました。軽自動車はフロントから後部にかけてほぼ水没し、かろうじて後部ドア付近が水面から出ている状態でした。私は車の工具箱から一本のハンマーを取り出し、水没した車に向かいました。

水没した車両周辺は、背伸びをしても足がつかないほどの水深で、車の屋根部分に手を添えないと顔が沈みそうでした。もう一人の部員と首までつかりながら、水面より少しだけ浮いているバックドアの部分に、ハンマーで「トン トントン」と合図をし、大きな声を付けてください。」と声をかけ、大きくハンマーを振り上げガラスをたたきました。ガラスは割れませんでした。二回目ですらに強くガラスをたたいたところ、ガラスは割れましたが、水が車内に流れ込み車が沈みだしました。

一瞬パニックになりました。に、割れたドアガラスから車内に流れ込む水の中に、腕が二本見えたので、無我夢中で腕をつかみ、部員の一人と共に車外に救出しました。

水かさが増して沈みそうになる高齢男性に声をかけしながら、他の部員と協力して安全な場所まで搬送しました。

救出した高齢の男性は、両足から出血があったので部員が応急手

当をしました。幸い大事に至らなかったため、自力で自宅へ帰ることができました。

【終わりに】

今回の豪雨災害は、八月八日午前〇時から午前五時までの降水量は三二六mmを観測し、例年八月の降水量以上が、わずか数時間で降ったこととなり、改めて線状降水帯による大雨の恐ろしさを肌で感じ、記憶に残る災害となりました。

私は、消防団に入団して三十三年経ちますが、新入団員だったころ発生した「平成五年の八・一水害」を思い出しました。その当時は、市内の至る所で土砂崩れが発生し、家屋の倒壊や、市民の生き埋めが発生しており、三日間にわたり行方不明者の捜索をしましたが、残念ながら命を救うことはできませんでした。

今回の豪雨災害により、河川や道路の決壊、土石流等により多くの家屋が床上・床下浸水し大きな被害となりましたが、「平成五年八・一水害」のような多数の犠牲者を出すこともなく、霧島市に死者がいないことは幸いでした。近年の地球温暖化による気象変化は極端になっており、今回のような自然災害がいつ起こるかわかりませんが、今後も地域住民の生命・財産を守るべく、今回の貴重な経験を教訓として、各種訓練をはじめとする消防団活動に部員一丸となって取り組むたいと思います。



「防火防災に関する」作文コンクール入賞作品



生活協同組合全日本消防人共済会では、毎年、全国の中学生を対象とした「防火防災に関する」作文コンクールを行っています。今年度は、「皆さんとともに、地域を守る消防団」を作文のテーマとし、各都道府県の支部から選ばされた作品四十二点の中から厳正な審査を行った結果、最優秀賞に鹿児島県薩摩川内市立川内南中学校二年 松山仁悠さんの作品が選ばれました。

最優秀賞

身近なヒーロー、地域消防団

薩摩川内市立川内南中学校

二年 松山 仁 悠

消防団。その名前を聞いて、僕が一番に思い浮かべるのは、紺色の制服を着て火災現場で活動する姿よりも、もっと身近な日常の光景だ。それは僕が住む地域の運動会で、広いグラウンドの駐車場で汗を流しながら車の誘導をしてくれるおじさんたちの姿だ。そして冬の寒い夜、赤い回転灯を光らせて、「火の用心！」という声とともに、赤い消防車で、ゆっくりと地域を巡回している姿だ。彼らは僕の地域ではまさに「地域の力になる」として活躍している人たち。そのものである。特別な能力や資格を持っていないわけではない。むしろや職業として防災活動を行っているわけでもない。そんな普通の人々が、なぜここまで地域の安全と安心のために力を尽くすのだろうか、その理由を考えることで、僕は地域の「絆」という言葉を持つ、本当の意味を知った気がする。

消防団の活動は、火災の消火準備活動だけにとどまらない。その役割は、僕が実際に見たような日常的なものから、命に関わるような緊急の事態まで幅広い。台風や集中豪雨の時には氾濫や浸水の危険がある場所に土のうを積んだり、川の水位を警戒して住民に避難を呼びかけたりもする。地震が起これば倒壊した建物の撤去作業や救助の補助、避難所運営の手伝いなど、消防隊員と同じような活動も行っている。地域消防団は、地域に暮らす人々にとっての「命綱」のような存在だ。地域の行

僕が一番すごいと思うのは、消防団の方々の活動がボランティアで成り立っていることだ。仕事や家庭での役割をこなしながら、自分の大切な時間を削って訓練に励み、地域の活動に参加している。地域の行事では朝早くや夜遅くまで会場整理や警備を行い、防災活動のために暑い日、寒い日関係なく巡回や声掛けを行っている。そこには、報酬や称賛を求めない気持ちよりも、純粋に「自分たちが住む地域を守りたい、家族や友人、地域の方たちを守りたい」という強い思いがあるのだろう。

僕たちが安全な日々を、安心して過ごしているのは、消防団の方々の地道な活動があるからこそである。そんな地域を支える消防団員の存在を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思う。消防団の方々の存在や活動が僕たちの生活を支えていることを忘れず僕たち自身も、地域の一員としてできることを積極的に取り組んでいきたい。そして、よりよい地域づくりを行っていきたい。僕たちの身近なヒーロー、消防団とともに。